The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドーナツを穴だけ残して食べる言語文化学的方法 ：会話分析による考察
Author(s)	岡田, 悠佑
Citation	言語文化研究. 2015, 41, p. 27-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドーナツを穴だけ残して食べる言語文化学的方法
―会話分析による考察―

岡　田　悠　佑

A conversation analytic approach to eat a doughnut while keeping the hole

OKADA Yusuke

Summary: This paper illustrates what conversation analysis（CA）can offer to the study of language and culture through discussing an ethnomethod to "eat a doughnut while keeping the hole" from a CA perspective. The analysis of conversations revealed that explicit and implicit silences are made relevant after the occurrence of a first pair part of an adjacency pair. Both silences are normatively attributed some meaning because of our cultural understanding; however, a type of response that invalidates the responsibility to answer the question's propositional content can leave a（implicit）silence as it is. CA can explicate the knowledge we culturally share and the competence we use the knowledge in/through communication.

キーワード：会話分析，言語文化学，沈黙

1．はじめに

ドーナツを穴だけ残して食べる方法は存在するか。インターネット上で生まれ広がったこの命題に対して大阪大学の研究者達が取り組んだ「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」（大阪大学ショセキ力プロジェクト，2014）は，「ドーナツの穴を残してどれだけドーナツを削ることが出来るか」という工学的視点（高田，2014）や「人はなぜこのようなパラドックスを人は考えてしまうのか」という人類学的視点（大村，2014）などそれぞれの研究者による専門分野からの命題への知見を紹介しており，各種メディアに取り上げられるなど（BS日テレ, 201; 読売新聞，2014）して多様な学問の面白さを世の中に伝えることに大きく成功している。数学と法学からは「4次元空間の座標軸を移動することでドーナツの穴を残して食べる方法」（宮地，2014）と「輪形以外の形状のドーナツを想定し，輪形ドーナツの穴のように中央部分だけもしくは中央部分以外を食べる方法，穴の多義性を利用して焦げた部分と落とし穴として粉砂糖にドーナツを入れ窪みを付けてからドーナツを食べる方法」（大久保，2014）という実際にドー

ナツを穴だけ残して食べる方法が提示されている。しかし著者達自身が述べているようにそれらの方法は常識的な理解からは遠いところで帰結してしまっている（仲野，2014参照）。常識を疑うことが学問の根本姿勢（中村，2014）であるが故とも言えるが，常識から離れたところにある学問ではなく常識を括弧に入れてその「常識」とはどのように成立するのかということを問うエスノメソドロジー的視点から常識的に理解出来る「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」を考察することも，これまでに欠けている学問の視点を提供するということにおいて意味があるのではないだろうか。

本稿ではエスノメソドロジーの流れを組む会話分析を用い，誰もが日常的に行い慣れ親しんでいる「会話」という言葉と文化による構築物における「ドーナツの穴」に相当するものを詳細に分析することを通じて次の三点を成すことを目的とする。(1）実際にドーナツをその穴だけ残して食べる方法を見出すこと，(2）その過程を通じて「会話」を対象とした学問である会話分析がどのような学問であるかを明らかにすること，(3）さらにどのような言語文化学研究―特定の場面・状況でどのように言葉を使う（あるいは使わない）ことでどういった意味の産出が可能となるか，どういった解釈を可能とするかという「言葉」と意味の創出及び解釈の知識体系として特定の集団に共有された「文化」（Lee, 1991）の接点の研究―を行うことが出来るものかを考察することである。

２．会話における「ドーナツの穴」の定義

会話からドーナツを穴だけ残して食べる方法を考える際に第一に必要なこととして先ず「ドーナツの穴」を定義したい。「ドーナツの穴」というものを我々が認知した時そこにあるものはただの空隙であり，実際にはそこには何もないのである。そのないという意味においてドーナツの輪の外側にある空隙と「ドーナツの穴」は物理的には何ら変わりないものである。にも関わらず，我々がドーナツの輪の中にある空隙を「ドーナツの穴」として認識することが出来るのは穴を囲む輪,「ドーナツ」が存在するが故である。つまり「ドーナツの穴」とは「ドーナツ」があって初めて正当に関連付けられる空隙であり「ドーナツ」がなければそもそも存在しないものである。

会話にもドーナツの穴に相当する空隙は存在する。それは「沈黙」である。沈黙の正体は音のない状態である。だが, 第一に会話というものが存在することで, ただの音のない状態が「沈黙」として人々に認識される。ここで次の図１（左側）での会話を見ていただきたい。

図１．ナルトと沈黙１．
（岸本, 2009b, p.156より抜粋）

図２．ナルトと沈黙２．
（岸本, 2009a, p.80より抜粋）

これはNARUTOという漫画の一場面である[1)]。鉢金を巻いているキャラクタ，ナルトが背中越しに綱手という女性のキャラクタに「カカシ先生は任務で里の外へ出てんのか？」と問いかけるが，綱手の吹き出しは「……」となっている。ここでは誰もがナルトの質問に対して綱手は「沈黙」していると理解することが出来るだろう[2)]。では図２では「沈黙」はあるだろうか。

図２の場面はナルトが修行をしている場面である。一コマ目では，ナルトは座禅を組み，その後ろにカエルの姿をしたキャラクタが棒を持って立っている。このコマでは両者とも何の音も発してはない。三コマ目でカエルがナルトを叩くことでようやくナルトが声を発しその後に続く三コマでは，カエルとナルトが発話を交わしている。では，一コマ目での音のない状態，これをナルトとカエルのいずれかに帰属する「沈黙」として認識することは出来るだろうか。おそらくほとんどの読者はそれは難しいと考えるのではないか。むしろ会話の外にある，どちらにも帰属しない音のない状態と考えることが自然だと思うのではないだろうか。

２つの事例から分かることは，先ず会話が無ければそもそも「沈黙」も存在しないということ，そして「質問」の後などの会話内の特別な局所において初めて「沈黙」が「沈黙」として可視化出来るようになるということである。前提条件がなければ存在しないという意味において「会話における沈黙」と「ドーナツの穴」は共通している。先の事例から分かるもう一つのことは，我々は会話のやり方を文化的規範として，つまり常識的態度として身に付けているということである。我々にそういった文化が備わっていなければ漫画を読むという行為自体成立しないだろう。時系列で行為が連鎖していく相互行為というシステム内部における行為同士の

---

1) 会話分析は自然に生起した会話のみを分析対象データとすると捉えられることが多いが，会話分析の創始者であるHarvey Sacksが述べる通り，会話データとはあくまでも文化としての規範を理解するためのものであり，規範を理解することに効果的であるならば自然に生起した会話以外を用いても問題はない（Sacks, 1984参照）。

2) 誰よりもまず質問者であるナルト自身が綱手の「……」を沈黙として認識しているが。この点については後ほど述べる。

関係性というPike（1967）が提唱した本来の内的視点から人々の会話のやり方を分析することで，人々が持っている文化，即ち特定の集団に属する人々が共有している話し方と行為の成し方にまつわる特定の意味解釈及び意味の産出の方法，を明らかにすることが会話分析の目的である。その会話分析を用いて会話における沈黙の事例を詳細に分析し，「会話における沈黙」がそのまま「沈黙」としての他の意味を関連付けられないまま会話が進んでいく事例，沈黙をそのまま残して会話を続ける人々のやり方を見つけることが出来れば，そこからドーナツを穴だけ残して食べる常識的方法を見出すことが出来るのではないだろうか。以下では会話における沈黙を実際の会話例から詳細に分析していく。

３．会話における沈黙の会話分析

3.1　会話における沈黙が関連付けられる局所

「会話における沈黙がそのまま沈黙として他の（例えば肯定や否定などの）どのような意味も帰属させられずに会話が進んでいく」という現象とはどのようなものか。先ずは会話において沈黙が関連付けられる局所を実際の会話例を詳細に見ることで明確なものとしたい。

抜粋１（D=Teacher, S=Student）[3)]

5　D:　o:kay, buy a car.（ . ）<u>what</u> <u>type</u> of car.
6　　（2.1）
7　D:　Toyota Porsche Ferrari:,
8　　（9）
9　S:　Ferrari.
10　　（.5）
11　D:　Ferrari:, nice.

これは日本の大学での英語授業における教師Dと学生Sとの会話の抜粋である。この抜粋部分の直前，Dの"what would you do if you have million dollars?"という質問に対し学生は"I want to buy a car"と答えていた。５のDの質問はその回答を受けて行われた質問であるが直後に回答はなく，2.1秒の間が６に残されている。その間の後の７でDは" Toyota Porsche Ferrari:,"という発話の終了部分が上昇調の発話により質問を行っているが，これは先の質問とは違い車のブランド名という回答例を提示した質問である。８でDがターンを取らず９秒間待った後でSは"Ferrari"と答え，11でDはその回答を受領している。

[3)] 抜粋における記号の意味については附録文字化記号一覧を参照のこと。

この抜粋が示すことは，第一に人は自分が質問を行ったなら相手は即座にその質問に対して回答を行うはずだという期待を持っていること，第二に質問に対して回答が行われない時，質問者は回答不在の理由を探るということである。この 2 点は「隣接ペア」という我々が持つ文化的規範によって達成されている。

隣接ペアとは「質問－応答」や「挨拶－挨拶」,「依頼－応じる/断る」などの第一ペア成分と第二ペア成分によって構成された一組の行為の連鎖である。その特徴は，（1）会話における前後に隣り合った位置で生じ，（2）第一ペア成分と第二ペア成分はそれぞれ別の参加者が行い，（3）第一ペア成分が先に生じ，（4）第一ペア成分はそれに対応する第二ペア成分を要求する（Schegloff & Sacks, 1973）というものである。隣接ペアの文化的規範性とは「一人の会話参加者が隣接ペアの第一ペア成分となる発話や非言語の振舞いを行ったなら，その受け手である会話参加者は行われた第一ペア成分に対応する第二ペア成分となる発話や非言語の振舞いを直後に行うはずだ」という文化として人々に共有された相互行為方法の理解によるものである。従って第一ペア成分に対応する第二ペア成分が行われなかった場合，人はその第二ペア成分の不在を見て取ることが出来る。この規範性が抜粋 1 において教師Dが6の2.1秒の音声のない状態を受け手側の学生の沈黙として捉えることを可能にしたのである。

隣接ペアの持つ規範性のさらに重要な点は，抜粋 1 の教師Dの 7 の発話にある。ここで教師Dは 5 の当初の質問を補足する形で回答例を提示した質問を行っているが，それは第二ペア成分（回答）を得られなかった第一ペア成分（質問）を意味的に修復することによる第二ペア成分の追求である。第一ペア成分が行われた直後に第一ペア成分に対応した行われるべき第二ペア成分が行われなかった場合，第一ペア成分を行った参加者は第二ペア成分の不在を「見て取る」ことが出来るため，その不在の理由・原因を探すことになる。そこで問題を解決することが出来ると踏んだ方法で当初の第一ペア成分を修復することによって第二ペア成分を追求するなどし，第一ペア成分を行った側は第二ペア成分の不在という「沈黙」をそのまま残さないようにするのである。抜粋 1 では 6 での2.1秒の回答がない状態を，回答法の一つを示して質問を再度行い当初の質問が求めていた回答の意味を修復することで受け手である学生は回答形式が分からなかったことにより沈黙していた，と質問者であるDが解釈したことが示されている。これは教室外の母語話者同士の会話でも同じである。

抜粋２（NHK夏休み子ども科学相談１）

1　先生:　.h だから , .hh（ . ）<だれとも違って自分にしかない> .h
2　　だけど .hh（.3）たったひとつだ（.2）っていう風に
3　　<思って:> .hh（.9）力くんが .hh 自分の命を と: っても
4　　大切にしてくださいな: .hh そういうもの［だからこそ .
5　子供:　　［ふ:ん

6 （2.8）

7 先生： だめ？

抜粋 2 はNHK夏休み子ども科学電話相談というラジオ番組での「なぜ人の命は 1 つなのか」という子どもの質問を巡るその子どもと専門家である先生との電話会話である。1–4で先生は子供に対し，「命をとっても大切にしてくださいな，そういうものだからこそ」という「依頼－応じる/断る」の第一ペア成分である「依頼」を行う。しかしその直後に子どもの応答はなく，2.8秒の沈黙（6）が残される。その後の7で先生は「だめ？」と問い直す。ここでも，第一ペア成分を行った側は直後に行われるべき第二ペア成分が行われない場合その不在を見て取りその理由や原因を探すことになるということが示されている。しかしこの抜粋が示すより重要な点は 7 での先生の「だめ？」という発話にある。

隣接ペアにおいて第一ペア成分に対応する第二ペア成分として機能する発話・非言語の振舞いには序列があり，最優先されるべき発話・非言語の振舞い（第一の優先応答）が存在する。そのため，「もしXが最優先されるべきものである場合，X以外の発話・非言語の振舞いはXが保留されている，もしくは出来ないということを意味する」（Bilmes, 1993, p. 391, 筆者訳）こととなる。言い換えれば，「第一ペア成分に対応する第二ペア成分であるXとYがありそれぞれが代替となる場合，沈黙がYを意味するのであれば，Xが第一の優先応答となる。そして，もしXが第一の優先応答である場合，沈黙はYを意味する」（Bilmes, 1994, p. 81，筆者訳）こととなるのである。「非難－応酬」という隣接ペアを例に取ると，参加者Aが参加者Bを「非難」した場合，第二ペア成分として再優先されるのは論理的な反論である。Bが沈黙した場合，それを行うことが出来ないとAに結論付けられるだろう。抜粋2での「依頼」という第一ペア成分に対しては「応じる」そして「断る」という行為が代替となるが，我々が有している文化から沈黙は「断る」を意味すると分かる。2.8秒の沈黙（6）の後で先生が「だめ？」と問い直したことは，会話の参加者で第一ペア成分を行った先生自身が2.8秒の沈黙を最優先の第二ペア成分である「即座に応じる」が保留されているもしくは可能でない，つまり子どもが依頼を「断っている」と解釈したことを示している。

抜粋 1 と 2 が示す通り，第一ペア成分が行われることによって見て取れるようになる第二ペア成分の「沈黙」の意味は決して何もない空隙ではなく，隣接ペアという文化的規範から第一ペア成分を行った参加者に特定の意味として解釈されるものである。前節の図 1 においてもナルトが綱手に「カカシ先生は任務で里の外に出てんのか？」という質問を行った後に綱手は沈黙していたがその沈黙に対してナルトは「……そうか……」と遅延して応じさらにその後に綱手の沈黙に対し何ら前向きなスタンスを示すことなく沈黙すること（「そうか」の後の「……」）で，最優先の第二ペア成分である「そうだ」という肯定を返すことが綱手には可能ではないこと，そのことから質問に対する回答は否定であると解釈していることを示している。

3.2　会話における「覆い隠された沈黙」

これまでの分析では第一ペア成分によって義務付けられた第二ペア成分の「沈黙」の意味は特定のものとして第一ペア成分を行った参加者に解釈されること，そして第一ペア成分を行った参加者は第二ペア成分を獲得すべく第一ペア成分を修復するか，あるいは特定の第二ペア成分を意味しているものするかのいずれかを選択し，「沈黙」をそのまま沈黙として残さないように処理した上で会話が進むことが分かった。つまり会話におけるドーナツの穴は一旦作られてもそのまま残されることはないということである。では「会話における沈黙がそのまま沈黙としての意味を関連付けられたまま会話が進んでいく」ような現象は無いのであろうか。次の事例から「沈黙」という会話現象を再考したい。

抜粋 3 （Sacks, 1992, vol.1. p.113）

（1）A:　Yeah, then what happened?

（2）B:　Okay, in the meantime she [wife of B] says, "Don't ask the child nothing." Well, she stepped between me and the child, and I got up to walk out the door. When she stepped between me and the child, I went to move her out of the way. And then about that time her sister had called the police. I don't know how she... what she...

（3）A:　Didn't you smack her one?

（4）B:　No.

（5）A:　You're not telling me the story, Mr B.

これはアメリカでの，社会福祉士Aと警察に通報されるような問題を起こしたBとの間での電話会話である。Bが結婚生活で問題を抱えており，夫婦間で何か問題を起こし通報されたという情報をAは警察から受け，Bに電話をかけている。ターン（1）でAが" then what happened?"と質問をし，ターン（2）でBが答え，ターン（3）でAが具体的な詳細について"Didn't you smack her one?"と尋ね，ターン（4）でBが"No"と答えたところ，ターン（5）の台詞"You're not telling me the story, Mr. B"につながる。この抜粋で沈黙はどこにあるだろうか。

前述の通り，隣接ペアの第二ペア成分として機能する発話･非言語の振舞いには序列があり，発話・非言語の振舞いXが最優先されるべきものである場合，X以外の発話・非言語の振舞いはXが保留されている，もしくは出来ないことを意味することとなる。ここで次の会話例を考えてみたい。高校生のAが彼の好きな歌を友人のBに聞かせ「これすごくよくない？」と尋ねた場合，第一の優先応答となるのはBが「すごくいい」といって同意することである。Bが何

も言わなかった場合，その歌は「よくなかった」とBがAの評価に非同意していると解釈することが出来る。ではBが歌とは無関係の数学の話題を持ち出した場合はどうだろうか。ここでもその歌の評価を避けるためにBが話題を逸らした，Aの意見に非同意している，と解釈出来る。この例の考察が示すことは，第一ペア成分が関連付ける第二ペア成分が行われるべき会話の局所での第二ペア成分として適格ではない行為は全て第一の優先応答が保留されているか出来ないこと，「沈黙」と同じものとして意味付けられるということである。その適格性は第一ペア成分がその命題的内容として関連付ける「話題」によって判断される。つまり「明らかな沈黙」以外に第一ペア成分が関連付ける話題から逸脱することによる「覆い隠された沈黙」があるということである（Bilmes, 1994）。上記抜粋では第一ペア成分を行った参加者自身が「覆い隠された沈黙」があることを見て取っている。

抜粋 3 のターン（1）で質問を行ったAはターン（5）において "You're not telling me the story, Mr. B" と述べている。ここで "the story" と不定冠詞の "a" ではなく定冠詞 "the" を用いて定式化することで，"what happened" に対する数ある語りの一つのバージョンをBは回答してはいるものの，Aが求めている「警察に通報され，社会福祉士が電話をするような出来事」である "the story" としてBの回答は不十分であるということ，つまり関連付けられた話題から逸脱しているということを示している。ターン（3）で "smack" したのか尋ねていることから，Aの求めている "what happened" に対する "the story" は何かしらのBが行った暴力を伴う出来事についての説明であることが分かる。Bの行った暴力を含まない説明（"move her out"）は全て「覆い隠された沈黙」として関連付けられた第二ペア成分を返していないものとされるのである。

抜粋 3 が明らかにしたことは，「会話における沈黙」には第一ペア成分の受け手が音や動作を発しないまたは行わないことによる「明らかな沈黙」と，関連付けられた第二ペア成分及び話題以外の発話または動作による「覆い隠された沈黙」との二種類があるということである。もしこの「覆い隠された沈黙」によって適格な第二ペア成分が不在のまま，第一ペア成分が適切な応答を得ずに隣接ペアが不完全なまま話題を次に移して会話が進むようなことがあれば，それは「会話における沈黙がそのまま沈黙としての意味を関連付けられたまま会話が進んでいく」現象の一つと言える。抜粋3では「覆い隠された沈黙」の後，第一ペア成分を行った側はその沈黙をそのままにせず第二ペア成分を追求していたが，他の会話ではどうだろうか。

次の会話はある日本の大学で英語授業のTA採用試験として応募学生に対して行われた面接の一部分である。比較的高額な時給が支払われ，また実際に授業に入って受講生と関わるという点で英語授業の「質」を左右するもので，どのようなTAを雇用するかは大学にとっても授業の受講生にとってもTAとして採用される学生にとっても重要な意味を持っていた。その採用試験としての面接では，面接員（英語授業を総括する教員）が応募者に一対一で話をし，途中英語で応募理由などを尋ねるということがなされていた。抜粋 4 はその応募理由への問いからのやり取りである。

抜粋 4 （IR=Interviewer, C16=Candidate no.16）

3　IR:　uh: so please tell me the reason（.4）why you apply
4　　for this job
5　　（1.1）
6　C16:　uh::（2.8）I wa（h）nto（h）mo（h）ney
7　　（.3）
8　IR:　[ahaha hahaha
9　C16:　[becau（h）se £because:£（2）I get（.4）
10　IR:　mm hm
11　C16:　ano（1.7）I get to: go to school
12　　（.4）
13　IR:　mm hm,
14　　（.8）
15　IR:　school, this university's?
16　C16:　uh ye（h）s
17　　（1.4）
18　IR:　hhh ↓ 'kay.
19　　（1.5）
20　IR:　is there any: other reason?

3–4での応募理由に関する質問の隣接ペアの第一ペア成分に対し，受験者は6で "I wa(h)nto(h)mo(h)ney" と笑いながら回答している。受験者は0.3秒の間の後でターンを再度取得し，9，11で "because I get to go to school" とその（お金が欲しい）理由を説明している。12で0.4秒の間があった後，13で面接員は "mm hm," と上昇調の発話による継続子（Schegloff, 1982）でターンを再度取って話すことを受験者に促している。しかし14でターンが取られず0.8秒の間が残ったことで面接員は11での受験者の "school" の意味の修復を "this university's?" と行う。それに対して受験者は直後に肯定するものの，その肯定に対しては何ら言語的反応は面接員から行われず1.4秒の間が17に残される。面接員は18でターンを取り息を吐いた後で下降調に "'kay" と受験者の回答を受け止める。19でさらに1.5秒の間が空いた後，20で面接員は再度ターンを取り，当初の質問に対して他の理由はないのかと尋ねる。この20での別の回答の追求は面接員が受験者の回答に納得をしていないこと，つまり適切な第二ペア成分が得られていないことを示している。

ここでは面接試験という状況での応募理由は何かという第一ペア成分に対する第二ペア成分として「お金が欲しい」は第一の優先応答ではないということを面接官は実際に「他の答えは

ないのか」と問い直すことで明らかにしている。13の継続子やその前後の間，17，19での間も受験者がより適切な応答を行うために面接員が受験者にターンを譲歩していると捉える事が出来る。ここでもやはり「覆い隠された沈黙」は第一ペア成分を行った側には見て取ることが出来るものでありそのまま放置されずより適切なものが行われるべく修復をされるものである。それは同じ採用面接試験でも次の抜粋のものとは対照的である。

抜粋 5 （IR=Interviewer, C13=Candidate no.13）

9 IR: why do you apply for this job
10 （.6）
11 C13: u:::n because（.2）£I have（.3）no£ money（h）
12 （.3）
13 IR: [hahaha
14 C13: [huhuhuh ↑a:nd [（.4）eh:（1）I want to:（.9） =
15 IR: [.hh £a:nd,£
16 C13: =eh::（1.6）keep（.7）hm? tch I want to::（.4）
17 speak with（.5）ºeh:º（1.6）ju- junior: students,=
18 IR: =mm [hm,
19 C13: [with English and（.4）English ee（('E' is a
20 course title））is（.3）theme is: very interesting,=
21 IR: =mm hm
22 C13: eh:（.5）for example I: speak-（.）eh I-（1）do:
23 presentation about（.7）eh: £animation Japan's,£=
24 IR: =mm hm
25 C13: hm so: I want to: .h（1）ºhm?º（1.2）I want to::（1.1）
26 listen mm .h eh: very: .h（.7）eh many:（.3）i-
27 interesting >presentation.<
28 IR: >mm hm< .h okay good good answer. so, .hh well the-
29 the next question is the:（.3）about contribution

9 での面接員の応募理由を尋ねる質問に対しこの受験者も "£I have（.3）no£ money（h）" 答えて笑いを誘っている。しかしその笑いの後すぐに" ↑a:nd"（14）とさらに回答が続くという談話標識を入れることで面接員をこれからの回答に志向させ（15での"£a:nd,£"），そして実際に14から27までで回答を行うことで28で面接員から "okay good good answer" という第二ペア成分として適切な回答が行われたという承認を得ている。ここでは，受験者は "£I have（.3）no£ money

(h)" という回答を笑いながら言うことで冗談とし，雰囲気を和ませてから（実際に面接員も笑っている），予告をして（and）すぐに真剣な回答を行うことで，ラポールを築き維持することに成功している。28での面接員の発話は "good answers" ではなく "good answer" であり，最初の回答は冗談でありその後の14から27までの回答を真剣なものとして捉えているのが分かる。抜粋4においても同じように面接員は受験者の "I wa(h) nto(h)mo(h)ney" という回答に対して笑ってはいるものの，その後に適切な回答が行われなかったことからその不在を解消すべく他の理由を求めることとなっている。

ここまで隣接ペアにおける第二ペア成分の不在を第一ペア成分が関連付ける話題から逸脱した不適格な応答による「覆い隠された沈黙」として見てきたが，「明らかな沈黙」の場合と同様に，第一ペア成分を行った側は「覆い隠された沈黙」をそのまま放置して会話を進めることはなくその穴を埋めるべく適切な第二ペア成分を追求していた。第一ペア成分を行った側が第二ペア成分の不在を見て取れる以上，「明らかな沈黙」も「覆い隠された沈黙」もそのまま沈黙として済まされるようなことはやはりないのだろうか。隣接ペアという概念の提唱者であるSchegloffは「[相手に何の推測も与えず]単純素朴に[第二ペア成分である]応答を行わないということは出来ない」（1968, pp. 1086, 著者訳）と述べているが，次に「単純素朴」ではないが人々が文化的規範に基いて行っている第二ペア成分を不在としてそのまま会話を進ませる方法を考察したい。

3.3　沈黙を残したまま会話を終える方法

次の会話は2007年の７月にアメリカ連邦議会上院司法委員会で行われたGonzales司法長官（当時）に対する公聴会である。この公聴会は政府の意に反する司法省職員をGonzales司法長官が権力を使って不当に解雇したのではないかという問題についての追求であり，上院司法委員会のメンバーである上院議員が司法長官に対して当の問題について質問を行っている。

抜粋６（S=Senator, G=Gonzales, C=Chairperson）

1　S:　is ↑that accurate the: (.) factually will you answer
2　a question as to a fact as to whether (1.2) you talked
3　McNulty about this ↑case for (.5) as much as five or ten
4　minutes?
5　(2.9)
6　G:　.tch (.2) I- I have no specific recollection as to this
7　pa- this particular case.
8　(.4)
9　G:　but- but I- but I ca:n tell you, (.4) we have a very

10 (.2) detailed process where hours are spent by lawyers,
11 (.5) including the U.S. attorney, (.) our capital case
12 review unit, >who then make [recommendations to the=
13 S: [I'm not- I'm not-
14 G: =[deputy attorney general
15 S: =[I'm not interest- I'm not interested in that. I'm
16 interested in an answer to my question. if you don't
17 kno:w, (.3) if you don't [remember i- i-
18 G: [I don't- I don't
19 [I don't recall-
20 S: [no wait a minute. I'm not finished asking you a
21 you a question.=If you don't kno:w or you don't
22 remember, (.6) what happened when you: (.) stood
23 on a decision to have a man ↑executed,
24 (1.4)
25 S: that's what you're saying.
26 (2.4)
27 G: I have no specific recollection about the amount
28 of time that I talked with Paul McNulty on this
29 particular i[ssue.
30 S: [well, would you disagree with McNulty
31 that it was five to ↑ten minutes?
32 (.9)
33 G: I can't agree ↑: (.3) with that if I- if I don't
34 re↑call sena[tor.
35 S: [okay, you can't agree with it. I
36 didn't ask you that. I asked you if you disagreed
37 with it.
38 (.4)
39 G: I can't agree ↑or disagree with it.
40 (1.5)
41 S: would you say that- (.3) five to ten minutes
42 would be ei ((=a)) quote significant amount of
43 ti:me for you to spend,

44　　（.5）
45　S:　on a case involving the death penalty?
46　　（.4）
47　G:　it would depend on the circumstances of the ↑case.
48　　and- and the recommendations coming ↑up
49　　（.3）
50　G:　a- nd the ↑facts.
51　　（.3）
52　　tha- i- tha- those would all dictate（.4）how much
53　　time I would-（.2）I would spend personally on a
54　　↑particular case.
55　　（.2）
56　G:　'coz we have a- we have a very extensive <review
57　　process> .hh within the department where hours
58　　are spent analyzing .hh what is the appropriate
59　　course of action for the de[partment ↑justices
60　S:　　[well, mister attorney
61　　general, I'm not totally unfamiliar with this sort
62　　of thing.
63　　（.9）
64　S:　>when I was district< attorney of Philadelphia,
65　　I had five hundred homicides a year.
66　　（.8）
67　　I didn't allow any（.4）assistant to a:sk for
68　　the death penalty that I hadn't personally <approved.>
69　　（1）
70　S:　and when I asked for the death penalty, I remembered
71　　the case.
72　　（1.5）
73　S:　thank you mister chairman.
74　　（.4）
75　C:　thank you.

1–4での上院議員の極性の質問，副司法長官であるMcNultyと当該事件（解雇された検事が

死罪とすることに反対していた事件）について議論したのは5〜10分だったのか答えられるかに対してGonzalesはyes，noのいずれでも答えず，当該事項に対して特定の記憶は無いという応答を返す（6–7）。第一ペア成分を行った上院議員からの反応はなく0.4秒の間が空いた後（8），Gonzalesは司法省が通常行っている事件全てに対する審査体制についての説明を行う。しかし上院議員はその説明の途中で割り込み（13），その説明ではなく自分の質問への回答に興味があると述べ，先の彼の質問に対して適切な第二ペア成分が不在であることを明らかにする。Gonzalesの割り込みを遮り彼は，覚えていないなら当該事件の被告人を死罪にするという決断をした時に何が起こったのか，と適切な第二ペア成分を得るべく当初の質問を修復する（20–23）。しかし，Gonzalesは再度，どの程度の時間McNultyと当該事件について話していたかという特定の記憶はないと応答する（27-29）。30で上院議員はGonzalesの回答はMcNultyに対して非同意の意かと修復して尋ねるが，33–34でGonzalesは覚えていないのなら同意は出来ないと答える。それに対して上院議員は，同意出来ないかではなく当該事項に対して非同意なのか，と再度尋ねる（36–37）。これに対してGonzalesは同意も非同意も出来ないと答える（39）。41–45にかけて上院議員は5〜10分は死罪に関する事件の議論に十分な時間であるのか，と一つから全ての死罪に関する事件へと一般化した質問を行う。47–59にかけてGonzalesは，事件の状況や部下から上がってくる助言，事実等によって要する時間は異なる，それは省内で何が司法省にとって適切な行為かという分析を何時間もかけて行う徹底した考察過程があるからだと答える。上院議員はこれに対して，自分はこういった事柄について知識と経験があり自分ならどの死罪に関する事件も思い出すことは出来たと述べ，委員長に自分のGonzalesに対する尋問が終わったことを伝え会話を終えている。

上記の通り，当初の上院議員の質問に対して第二ペア成分を行う側であるGonzales司法長官は応答はしているもののその質問の命題的内容・話題については何ら回答していない。彼の応答に特徴的なことは記憶の無いこと，思い出せないことによる質問の命題的内容に対する回答の回避である。証人喚問や議会答弁，司法委員会といった公的な場で，問題となっている出来事の核心にせまる質問を受けた場合，「はい」「いいえ」のいずれで答えても，その通りであった場合でも後で嘘を答えたと分かった場合でも，社会的（特に法的）制裁を受けることとなる。「記憶が無い，思い出せない」といった応答は質問に対する回答能力のなさを示すことで「はい」「いいえ」のいずれも選択すること無く質問をやり過ごす方法，つまり社会的（特に法的）制裁から逃れる方法と言える。それは33–34でのGonzales司法長官の発話"I can't agree with that if I don't recall, senator"から，彼自身がその方法を理解していることが分かる。これらの応答方法は，質問という隣接ペアの第一ペア成分によって義務付けられた第二ペア成分である回答として形式上機能はしているため「明らかな沈黙」ではないものの，質問が関連付けている命題的内容に対しての回答では決してない。それは上院議員による第二ペア成分の追求から明らかである。従って「覆い隠された沈黙」の一つであるとして考えられるが，これまでに見た他の覆い隠さ

れた沈黙とは違い「記憶が無いため回答出来ない」によって覆い隠された沈黙の意味を捉えさせない。実際に抜粋6の会話はその後，第一ペア成分の行為者である上院議員は「普通は思い出せるはず」ということを話題とし，思い出せないことの異常さを指摘することを話題にするものの，「McNulty副司法長官と話したことに同意するのかしないか」ということからは回答のないまま会話が終わっている。上院議員の「思い出せるはずだ」という内容の発話はGonzalesの行為との対比としてのレトリックを構成しており、Gonzalesが「思い出せないとしてわざと回答をせず、回答を覆い隠しているのは第一の優先応答を返すことが出来ないことであり，やましいことがあるからに違いない」ということを含意しているとも言えるだろう。だが議事録に残る会話内で実際に話されたこととして厳密な意味では質問への回答は行われないまま，意味の定まらないまま空隙となったままである。抜粋 6 は「覆い隠された沈黙」の一つとして質問への回答能力の無さを応答することによって質問の命題的内容を行わず質問によって関連付けられた話題に対して沈黙し,その意味を特定させずに会話を終えることの出来る方法があるということの証左である。

４．ドーナツを穴だけ残して食べる言語文化学的方法

本稿では人々が日常的に行っている会話から常識的に理解可能なドーナツを穴だけを残して食べる方法を，隣接ペアという我々が有する文化的規範を中心に検討してきた。会話において隣接ペアの第一ペア成分が行われた時，必然的に第二ペア成分が行われることが期待される。この時点で会話上では第一ペア成分によって持ちだされた話題というドーナツが生まれる。第一ペア成分に対応した第二ペア成分を行うことでその話題に応答することはそのドーナツを残さず食べるということであり，第二ペア成分を行うべき場所での沈黙はドーナツの穴に注意を向けることである。第一ペア成分が関連付ける第二ペア成分の序列という文化的知識により，第二ペア成分を行うべき参加者が「明らかな沈黙」によって他の話題へと会話を進めること，つまり穴だけを残すことは出来ない。「覆い隠された沈黙」を残す方法の中でも「記憶が無い，覚えていない」との応答により第一ペア成分により持ち出された話題を終了させ会話を別の話題へと進めることのみが，前節での実際の会話の分析より明らかとなった会話においてドーナツの穴を残して食べる方法である[4)]。

会話分析より得られた常識的方法を実際のドーナツを穴だけ残して食べる方法に置き換えれば次のようになるだろう。先ずドーナツの穴には「明らかな穴（空隙）」と「覆い隠された穴」がある。そこでドーナツの穴をドーナツと同じとも別物とも取れるようなもの，例えばスポン

[4)] 本稿では「会話」の単位を１つの話題として論を展開してきたが、会話の単位を話題ではなく１つの行為連鎖として見た場合、関連付けられた行為が起こらないまま、その行為の不在が他のどのような行為を成しているとも解釈されずに不在のまま次の別の行為連鎖に移るようなことがあれば、それも会話においてドーナツの穴だけを残して食べる方法と言えるだろう。

ジケーキで埋める。そして元のドーナツの輪の部分だけを食べ穴を埋めたスポンジケーキのみを残す。そうすることでスポンジケーキで覆い隠されたドーナツの穴だけが残る。これが「ドーナツを穴だけ残して食べる常識的方法」である。

しかしこの方法ですっきりと納得出来るかと言われればそうではないだろう。もやもやとした気持ちが残るのが当然である。前節の抜粋 6 での上院議員の発話に見られるよう，会話においても穴があればもやもやするのが当然のことである。だがしかし，もやもやすることは果たして悪いことなのだろうか。もやもやしないということは果たして良いことなだろうか。ドーナツに話を戻せば，そもそもドーナツにおける穴とはドーナツを油であげた時にまんべんなく火が通るように設けられたものだという説がある（Wikipedia, n.d.）。同様に，会話における沈黙にも役割がある。次の二つの（架空の）会話例を比べてみたい。

会話例 1

1 A: ((写真をBに見せ)) このアイドルよくない?

2 B: よくない.

会話例 2

1 A: ((写真をBに見せ)) このアイドルよくない?

2 (.9)

3 A あ, そうでもない?

4 B: う:ん　そうでもないかな:.

自分をA、友人をBとして考えた場合，例 1 のBの応答の方がより強い否定という印象を受け気分を害するのではないだろうか。反面，例 2 の方は否定が和らげられていると受け取れBに対して例1よりも嫌な印象は受けないのではないだろうか。明らかな沈黙という穴を使うことで,「否定」という行為を和らげ，人間関係を傷つけることがないように出来るのである。そして「記憶が無い，覚えていない」という応答により覆い隠された沈黙を作り残すことも社会的（特に法的）制裁から逃れる方法としてその発話者には大きな意味のあることであり，記者会見や議会証言などで使われることが多いものである。会話における明らかな沈黙と覆い隠された沈黙のいずれとも社会の中で特定の意味のある社会的行為を成す重要なものと言える。物事をはっきりと伝えずぼやかすこと[5]，会話において穴を作ること残すことにも果たす社会的機能があるのである。

会話分析とはこのような社会行為を成す人々の方法（エスノメソッド）を解明するものであ

[5] 沈黙以外では例えば不確実性を加えることで他者の言葉を訂正する際のきつさを和らげる "I think" の使用が挙げられる (Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977, p.378参照)

る。その方法，会話において言葉を使う，使わない，言葉を使って何かを行う，言葉を使わないことで何かを行うということは，全て会話の参加者が共有する文化，即ち特定の集団において共有されている意味の創出・解釈方法及び知識体系，に基づいて行われている。会話分析によるドーナツの穴を残して食べる方法とはつまり，特定の場面・状況でどのように言葉を使う（あるいは使わない）ことでどういった意味の産出が可能となるか，どういった解釈を可能とするかという「言葉」と「文化」への知識によって成される言語文化学的方法と言うことが出来る。

５．おわりに: 言語文化学としての会話分析が出来ること

言語文化学としての会話分析が出来ることはもちろんドーナツの穴を残して食べる方法を明らかにすることだけではない。会話における意味の創出と解釈は隣接ペアなどの人々が共有する文化およびそれに対する常識的態度という文化的規範によって成り立ち，そして前節までで見た通り参加者同士が実際にどのような意味でお互いの発話を含む振舞いを解釈しているかというコミュニケーションの過程は会話の中で「見えるもの」である。会話における参加者の発話を含む振舞いそれぞれが成す意味を会話の流れという文脈，特に前後の振舞いとの関係から説明していく会話分析というアプローチは，会話の中で言葉と文化を行使する能力，つまりコミュニケーション能力の解明とその応用に貢献することが出来る。倫理的問題は別として抜粋6でGonzalesが示した沈黙をそのまま残すことで質問が関連付ける話題に応えずにやり過ごす方法も一つのコミュニケーション能力であると言える。そしてそのような相互行為の方法を知っておくことで困難な状況を乗り切ることが出来ることもあるだろう。

例えば前節抜粋 1 の第二言語教室での会話は，教師による質問という日常的に教室で行われている行為をどのような序列で質問を行えばよいか，つまり最初の質問定式はどうあるべきでそれが回答を得るのに失敗したときにはどういった定式で質問をやり直すべきか，という問題への一つの回答となる。抜粋 1 のような事例を詳細に見ることで教室会話を局所ごとにどのように組み立て学習者の学びを最大限にするかという「教室での教師の相互行為能力」（Walsh, 2006）を明らかにし，具体的な事例とともにその方法を示すことで教師教育へと活かすことが出来るだろう（Okada, 2013, in press参照）。また抜粋 4 と 5 の実際の第二言語でのコミュニケーション能力が評価される場面である英語での採用面接の実例が明らかにすることは，受験者の評価は話す内容だけではなく話し方でも決まるということである。適切ではない回答も「冗談」として伝えることが出来れば親密さを生むことが出来，それは受験者の高い評価へとつながる（Kerekes, 2006）。抜粋 4 との比較から抜粋 5 が示したのは応募理由を「お金がないから」と笑いながら回答し，すぐに "and" と別の理由があることを伝え実際にその回答を行うという，冗談としての応答と真剣な回答を会話の連鎖の中で連結していると解釈されるように話すことで

冗談を冗談として伝えラポールを築き維持するという具体的な方法である。これは面接試験のような利害関係が大きく働く場面での相互行為で受験者が使える方法でもあれば，面接する側が評価対象として取り入れることも出来る方法でもある。会話分析は言葉と文化の会話における具体的な使い方を明らかにすることが出来るのである。

実証主義などの事実論的パースペクティブに基づく研究では人々の能力を実際には目に見えないものと想定しデータからその能力を推測しようとするが，会話分析はデータ内で参加者が相互行為を構築していく中でお互いに実演している能力を自然主義的に記述していく。一つの会話でのコミュニケーションの方法の一般化可能性は，採集した会話自体の一般化可能性ではなく，会話内で行われた方法の可能性という意味での一般化可能性である（Peräkylä, 1997）。つまり，無作為抽出した第二言語教室での会話という意味でどの教師であっても特定の行為を特定の方法で行うだろうというような一般化可能性ではなく，一人の教師の特定の方法による特定の行為の遂行であっても同じく教師として第二言語教室で会話を行うものであれば誰でも行うことが出来るというコミュニケーション方法の可能性としての一般化可能性である。先の抜粋2の事例では，教師は最初に何のヒントもない回答形式の幅の広い質問を行い，学生からの回答がないことを見た後に回答例を提示することで回答の難易度を下げた質問を行った。当初の "what type of car." という質問は学生に質問が求める回答形式を自分で考えることをさせることで第二言語教室会話の目的である目標言語（英語）を学ばせることを行い，それに回答出来ないと見れば次に回答例を提示した質問を行うことで学生に質問の一つの理解の仕方と回答法を教え目標言語での会話を成立させるという，第二言語教室における質問行為の「優先化」を抜粋 2 の教師は行っていると言える。この方法自体はどの教師でも行使可能であろう。実際の会話に表れた方法を記述して可視化することで問題とする会話及びそこでのコミュニケーション方法への理解を深めるという会話分析の解釈学的なアプローチによる研究は，法則制定的なアプローチの研究とは異なり結果として何かを予測することはない。しかし研究対象である会話におけるコミュニケーションの在り方に対する深い理解は当該会話において参加者が行使可能なコミュニケーションの方法，資源を増やすことへとつながるだろう。誰もが言葉と文化を使って日常的に行っている会話というものを詳細に記述することで会話における言葉と文化の使用法を可視化し，より良いコミュニケーションへの洞察を与えること。それが言語文化学としての会話分析が出来ることである。

参考文献

Bilmes, J.（1993）. Ethnomethodology, culture, and implicature: Toward an empirical pragmatics. *Pragmatics*, 3（4）, 387-409.

Bilmes, J.（1994）. Constituting silence: Life in the world of total meaning. *Semiotica*, *98*（1-2）, 73–88.

BS 日テレ（2014）. 久米書店 8 月24日

Kerekes, J. A.（2006）. Winning an interviewer's trust in a gatekeeping encounter. *Language in Society, 35*（1）, 27–57.

岸本 斉史（2009a）. NARUTO - ナルト - 巻ノ四十五 集英社

岸本 斉史（2009b）. NARUTO - ナルト - 巻ノ四十六 集英社

Lee, J.（1991）. Language and culture: the linguistic analysis of culture. In G. Button（Ed.）, *Ethnomethodology and the human sciences*（196–226）. Cambridge: Cambridge University Press.

宮地 秀樹（2014）. とにかくドーナツを食べる方法 大阪大学ショセキ力プロジェクト（編）ドーナツを穴だけ残して食べる方法 大阪大学出版会 pp. 57–80.

中村 征樹（2014）. はじめに 大阪大学ショセキ力プロジェクト（編）ドーナツを穴だけ残して食べる方法 大阪大学出版会 pp. i–v.

仲野 徹（2014）. 挑め！世紀の難問『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』HONZ 2014年 2 月24日 <http://honz.jp/articles/-/40159>（2014年 8 月 1 日）

大久保 邦彦（2014）. 法律家は黒を白と言いくるめる？　大阪大学ショセキ力プロジェクト（編）ドーナツを穴だけ残して食べる方法　大阪大学出版会 pp. 167–186.

大村 敬一（2014）. パラドックスに潜む人類の秘密 大阪大学ショセキ力プロジェクト（編）ドーナツを穴だけ残して食べる方法 大阪大学出版会 pp. 125–142.

大阪大学ショセキ力プロジェクト（2014）. ドーナツを穴だけ残して食べる方法 大阪大学出版会

Okada, Y.（2013）. Prioritization: A formulation practice and its relevance for interaction in teaching and testing contexts. In T. Greer, D. Tatsuki and C. Roever（Eds.）, *Pragmatics and Language Learning Vol. 13*（pp. 55–77）. Honolulu, HI: National Foreign Language Resource Center.

Okada, Y.（in press）. Contrasting identities: a language teacher’ s practice in an English for specific purposes classroom. *Classroom Discourse*.

Peräkylä, A.（1997）. Reliability and validity in research based on naturally occurring social interaction. In D. Silverman（Ed.）, *Qualitative research*（pp. 201–220）. London: Sage.

Pike, K. L.（1967）. *Language in relation to a unified theory of the structures of human behavior*（2nd ed.）. The Hague: Mounton.

Sacks, H.（1984）. Notes on methodology. In J. M. Atkinson & J. Heritage（Eds.）, *Structures of social action*（pp. 21–27）. Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks, H.（1992）. *Lectures on conversation*, Volume I & II. Edited by G. Jefferson. Oxford: Blackwell.

Schegloff, E. A.（1968）. Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist, 70*（6）, 1075-1095.

Schegloff, E. A.（1982）. Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. In D. Tanen（Ed.）, *Analyzing discourse, text and talk*（pp. 71–93）. Washington, DC: Georgetown University Press.

Schegloff, E. A., & Sacks, H.（1973）. Opening up closings. *Semiotica*, *8*（4）, 289-327.

Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H.（1977）. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53（2）, 361–382.

高田 孝（2014）. ドーナツを削る 大阪大学ショセキ力プロジェクト（編）ドーナツを穴だけ残して食べる方法 大阪大学出版会 pp. 19–34.

Walsh, S.（2006）. *Investigating classroom discourse*. New York: Routledge.

Wikipedia.（n.d.）. ドーナツ . Retrieved on April 3, from http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3 %83%89%E3 %83%BC%E3%83%8A%E3%83%84

読売新聞（2014）. ドーナツの穴だけ残す方法…阪大の先生真剣解答 6 月11日

附録（文字化記号一覧）

（.2）	0.2秒の音声のない状態	,	直前の発話終了部分の音調の半上昇
（1）	1秒の音声のない状態	↑	直後の発話部分の顕著な音調の上昇
（2.3）	2.3秒の音声のない状態	↓	直後の発話部分の顕著な音調の下降
（.）	短い（0.19秒以下の）音声のない状態	h	呼気音（hの数だけ呼気音が続く）
=	途切れなく密着した発話	.h	吸気音（hの数だけ吸気音が続く）
[	発話の重なりの開始	wo（h）rd	発話部分の呼気を伴う産出
（word）	不明瞭な発話	under	発話の強調
（（ ））	参加者のジェスチャーなどの記述	> <	周辺よりも速い発話
-	言葉が不完全で途切れた状態	< >	周辺よりも遅い発話
:	直前の音の引き伸ばし	£word£	笑い声で産出されている発話
?	直前の発話の終了部分の音調の上昇	°word°	ささやき声で産出されている発話
.	直前の発話の終了部分の音調の下降	WORD	周辺よりも大きな声の発話